
IS 歪んだ世界

男の娘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 歪んだ世界

【Zコード】

Z5703Z

【作者名】

男の娘

【あらすじ】

死ぬはずではなかったのに死んでしまった?

神様がお詫びにISの世界に転生させてくれるらしい。

しかし、男ではなく女?

じゃあ、男にしてと頼んだら、男と女の体が宿る「重人格ならぬ」重人格になつた。

しかし、転生した世界はぼくがいることにより歪んでしまつた。ぼくのせいでも歪みが出来たならぼくがその歪みを正すまで。

作者の処女作です、至らない点もあるとおもいますが末永く見守ります。

すべてあることがあります。

プロローグ（前書き）

ひょんな事から始めた作品ですが、どうか見てくわると嬉しいです。

では、IS 歪んだ世界どうぞ。

プロローグ

プロローグ

僕は起きると真っ白な空間にいた

「あれ、ここどこだ。」

「ここは、あの世との

世の狭間だよ。」

なるほど、ここはあの世との世の狭間だそうです、ってどうして
そんなとこ元僕はいるの。

「死んだから。」

えー、僕は死んだのそんな。

「イヤーメンゴメンゴ、私たちの手違いで。」

えー、ちょっとどうしたことですか、てか貴女誰ですか？

「あー、そう言えば自己紹介がまだだったね。私は神様だ。」

へー神様かー、って神様！？

「うん、神様」

あれ、僕今まで声に出してなかつたよな。なんで神様はわかつたん

だ。

「だつて神様ですか」

神様なんでもありなのかよ、てか手違いつて何。

「実はかくかくシカジカで」

つまり僕は死ぬはずじゃなかたのに、他の人と間違えられて死んだ
と。

「そういうこと。お詫びていつてはなんだけど、新たな人生を歩ま
せてあげよう。」

新たな人生?

「やつ、君の好きな小説で書いつ転生つてやつ。」

はあ

「で、何か能力が欲しいとかない。」

その前にどこの世界に転生するんですか?

「あ～ISの世界だよ。」

ISがあれ好きなんだよね。

「君を転生させるとちょっと怪しが起きるけど何とかしてね。あと、
転生すると碧衣だから」

え、女なのじゃあ男にしてください。

「それが出来ないんだよね。じゃあ一重人格ならぬ二重人格はどう？」

二重人格？

「細かいこと気にしない。他にほしい能力は？」

じゃあ剣と銃と武術の能力を上げて、あと運動能力とHISの操縦技術と作る技術を。

「はいはーい。あとはHISを決めてね。」

HISは近接主体の状況によつて変形する、ストライクみたいなのがあとAIを乗せて。

「あいよ」

あと篠ノ之家の子供がいいな。

「生まれは無理だけど拾つて貰つことなら出来るよ」

じゃあそれで

「わかったよ、じゃあ良い人生を。」

さよなら神様

「さよなら」

プロローグ（後書き）

誤字脱字感想とつありましたらよろしくお願いします。

次回 第一話

「やあ、元気かな。」

拾われた結歌

「元気はいいよ、ははは」

狂った天才

次回

「出会いと狂いとあらわる天災」

お楽しみに

第一話　玉盆（眞理也）

第一話です

第一話 出会

あれ「」? ？」

「オギヤー オギヤー」

あー、そう言えればわたし転生したんだった。
どうもわたしは篠ノ之結歌しののゆいがです。

転生して路上で泣いていたところ束お姉ちゃんに拾われて篠ノ家の子供として育てられることになりなした。

「オギヤー」

隣にいるのは妹の篠ちゃんです。
わたしが拾われた1ヶ月後に生まれました。
この篠ノ之家の父は剣道の師範しはん代だそうです。
神様に剣道のスキル貰つといて良かつたー。
大きくなつたらお父さんに剣道を教えてもらつんだー。
楽しみ。

ガチャガチャガチャピン

この音は束お姉ちゃんが来たようです。

「やあやあ元気かなお一人さん」

「「ダアツダアツ」」

「元気のよつだね元気はいいよはつはつは~」

高笑いしてどつか行きました。何したかつたんだろう?

お姉ちゃんは天才らしいんですが、わたしには変人にしか見えませ

ん。

こうしてわたしの篠ノ之家での生活が始まった。

第一話終わり

第一話 王余（後書き）

誤字脱字感想といつありましたが、よろしくお願いします。

次回 第一話

「なにこの数字列」

始まる開発

「これわかるのゆにわやん」
ばれる才能

次回

「睡眠と理科」と「開発」

お楽しみに

第一話 開発（前編）

第一話です。
じつわ

第一話 開発

「いつも結歌です。

わたしは小学生になりました。

今は篠ノ之道場ど剣道の稽古をしています。

道場つて言つても門下生が三人しかいないんですがね。三人の内一人は分かりますよね、もちろんわたしと篠ちゃんです。もう一人は原作の主人公キング・オブ 唐変木の織斑 一夏君です。お姉さんの影響で剣道を始めたそうですね。さすがシステムですね。

「お姉ちゃんもうそろ終わりにしよ。」

あ、もうそろそろ千冬さんが迎えに来る頃ですね。ちなみにいまお父さんは用事で出掛けているので時間が来たら終わらせと頼まれました。

「やうですね。もうそろそろ終わりにしますか。」

ちなみにわたしは、剣の才能を神様に貰つたのでこの中で一番強いです。

「ふう、疲れたぜ。」

「一夏あ」

「ちょうど良かつたですね。

千冬さんが迎えに来ました。

「ちょうど良かつたです

ね。今終わつたところです。」

「やつが。よし一夏帰るわ。一人ともありがとな。」

「はい。お疲れ様でした一夏君。」

「バイバイ一夏」

「おひ、じやあな篠、結歌わん。」

何で篠ちやんは呼び捨てなのにわたしあさん付けなの。まついいか。

「篠ちやん帰らうか」

「うそ」

相変わらず篠ちやんは可愛いな。

「「ただいま。」」

「お帰り、篠ちやん、ゆいちゃん。」

「ただいま姉さん」

「ただいま、お姉ちゃん。お姉ちゃんまた部屋にこもってたでしょ。」

「「うそまあね、あはは」」

お姉ちやんは「こども」と「なんなん」です。

学校から帰つて來たらいつと部屋に固ます。

「なにやつてんの」

「一人にはまだ早いよ」

早いつてことはたぶんHISのことでしょひづね。

「やつなんだちやんと寝てね。」
「わかつてぬよ。」

わかつてゐるんでしょ？が、田下にすゞこ隠が出来てます。

「じゃあ、『じ飯できたら呼ぶから。』

「うん、分かったよ。」

「篠ちゃん行くわ。」

「うん。」

「バイバイ。」

今日はお母さんにお料理を教えてもらいます。

「「お母さん」」

「お帰り一人とも、じゃあ手洗つて来てね。」お母さんは優しい人です。

それに料理も上手です。わたしもこんな人になりたいです。

「わかつた、お姉ちゃんいー。」

「うん。」

30分後

「ゆいちゃん、『じ飯できたらから、お姉ちゃん呼んでき。』

「はーい。」

私は手拭いてお姉ちゃんの部屋に向かいます。ちなみにお姉ちゃんの部屋はわたしの部屋の隣です。

「お姉ちゃんさ、『』飯できたよ。お姉ちゃんー。」

返事がない、寝てるのかな?

「お姉ちゃんに入るよ。」

ガラガラ

お姉ちゃんの部屋は薄暗く本やら向やうで散らかってます。パソコンの前にお姉ちゃんはいました。

「お姉ちゃん。」

何かに真剣になつてわたしの声に気づいてないようです。パソコンを覗くと何かの数字の列があります。

「これは何かのプログラム?でもいろいろ間違えてる。」

「ツツ!?ゆこちゃんこれ分かるの?」

「え、あ、うん少しだけ。」

これはHISのプログラム?神様にHISの技術もひつて良かつた。

「本當だ。……す、いねゆこちゃん!」

まあ神様のおかげだけ。

ああ、お姉ちやんにナーテナーテされてる

「ナーテかなあ、えへへ。」

「ナーテだよ。」

「あ、それより『飯だよ。』『うひ。』」

「うひ。」

次の日からエリの作成を手伝わされる事になるのです。

第一話 開発（後書き）

誤字脱字感想とつありましたらよろしくお願いします。

次回 第三話

「おーい、一夏~」

新たなる出会い

「お姉ちゃんにいつこう本持つてるよ」

知らされる真実

次回

「友情と真実と新たな出会い」

お楽しみに

第二話 友情（前書き）

短いですが第二話です。
じつや

第二話 友情

おはよーひーじやーこます。

結歌です。

わたしひこまめ篠ちやんと一緒に登校中です。

あ、一夏君です。

「おはよう一夏。」

「おはよーひーじやーこます一夏君。」

「おう、一人ともおはよー。」

一学期になり学校にも慣れて来ました。
こんなやつどりも毎日のことです。

「おーい、一夏あ。」

誰かがこっちに向かって走って来ます。

あれ、この人は確か同じクラスの佐藤優斗君だっけ。

「お、おはよーひーじやー。」

「おはよー一夏。おはよーひーじやーわんたん。」

「おはよう」

「一夏君こいつの間に仲良くなつたの?」

「こやせー、優斗が面白に本持つてて。」

はあ、一夏つて本当単純だよね。

「一夏これ昨日の続き。」

「おう、ありがとう。」

何々、あ、これガンダムの小説じやん。
アニメで見たです。

「優斗君、これアニメでやつてたよね?」

「篠ノ之さん知つてるんですか?」

「うん少しだけ。」

やつぱりやつてたんだ。

面白かったなー。

確か主人公はキラ・ヤマトだっけ。

「知ってる人がいたんだね。」

今度ガンダム創るか。

「お姉ちゃんのお部屋にそりゃう一本いっぱいあるよ。」

なに、何故知つているんだあ簞ちゃん。

あれは本棚の一番奥において前に本を二重においたはずなのに。

「何で簞ちゃん知つてるのかな?」

「お姉ちゃんが読んでるの見たから。」

「う~、何で知ってるの知つても言わないでよ。」

「う~、ごめんねお姉ちゃん泣かないで。」

泣いてないもん。

「じゃあ手繋いでくれたら許してあげる。」

「うん、はい。」

あー簞ちゃんの手柔らかいし暖かい。

「えへへ。」

「お姉ちゃん許してね。」

「うん。あ、優斗君つてスタイル良いよね何かスポーツやってるの

?」

「うん、アーチェリーを少しね。」

ヘーアーチェリーかカツコいいな。

キーンゴーンカーンゴーン

「大変チャイムだ、早くいこ。」

これが佐藤優斗との出会いであった。

第三話終わり

第三話 友情（後書き）

誤字脱字感想とつありましたらよろしくお願いします。

次回 第四話

「こいつがリボンしてたらおかしいかよ」

怒る一夏

「君たちはどんな声でなくかな」

キレる結歌

「よろしくね」

新たな友達

次回

「怒りて友達と転校生」

お楽しみに

第四話 友達（前書き）

第四話です。オリキヤラが出てきます。では、どうぞ

第四話 友達

時は流れ一年生になりました。

「今日は、転校生を紹介します。」

転校生が入つてくるとクラスがいきなり騒がしくなりました。
わあ、瞳がアリアみたい。

「転校生の夜長桃華よながももかです。よろしくお願ひします。」

転校生こと桃華ちゃんはきちんと一礼して席につきました。
黒髪にアリアカラーの瞳可愛いな。

「では、授業を始めます。」

ハアーまたつまらない授業が始まります。

ISの理論を作りますか。

ポッパー

休み時間

「ねえ、君どー生まれ。」

「え、あ、」

「どんなことが好き?」

「あ、えーと。」

「黒髪に赤い瞳、ハアハア。」

「ひつ、」

休み時間になると、クラスの人たちは、一斉に桃華ちゃんに質問しています。

てか最後の人は質問じゃないでしょ。

「あーゆつのつてバカだよね。一人一人言わなきゃわかんないのに

ね。」

「そうだねー。」

まあどうでもいいや。
さて続きやりますか。

「お姉ちゃんまたそれ?授業中もやつてたでしょ。」

お、さすが篠ちゃんよくみてるな。

「うん、そうだよ。」

「なあ、なんだそれ。」

「僕も知りたいな。」

「私も。姉さんとなんかやつてるのと関係あるの?」

「まだ三人には、早いよ。」

「そう三人には、早すぎる。」

「なんだよそれ。まあいいや。」

「そういえば今日はどうする? 皆暇でしょう。」

今日は剣道の稽古もないし暇だな。

「じゃあ一夏の家行く?」

「いいぜ、俺んちな。」

「うん、じゃあ明日は休日だし、泊まろかな。」

千冬さんの部屋も掃除しなきゃいけないしね。

「いいぜ、じゃあ一緒に飯作ろっぜ。」

よし、なに作ろうかな。

「うん、じゃあ材料買つとくね。」

「ああ。」

「篠ちゃんも泊まる?」

「うん。」

よし、決まったね。

私は午後もI-Sの理論をたててました。

1ヶ月後

「おい、外人なんか言えよ。」

「おい、男女。今日は木刀持つてないのかよ。」

「日本人です。」

「……竹刀だ。」

「くつへ。お前みたいな男女には武器がお似合いだよな。」

「……。」

「お前田の色変だもんな。」「しゃべり方変だもんな。」

「……。」

あ～またやつてるよあこつら、田の色ならわたしも一緒にだらつてーの。

まあ、言つても、泣かすから無駄だらうな。

「やーい外人。」

「やーいやーい男女ー。」

あーうつざいなー、掃除してんのに邪魔だなー。

「…「つせにな。テメーら暇なら帰れよ。それか手伝えよ。ああ？」

「…そりだよ、カスがバカはとつと消える。」

一夏君も怒つてゐる様だ、まあ私も限界寸前だけど。

「なんだよ織斑お前こいつの味方かよ。」

「くつくつ、この男女が好きなのか？」

「お前も外人のくせになめんなよ。」

「頭がちょっとといいからつて調子にのんなよ。」

ハアー、本当にうやうバカは嫌いだ、て言つたテメーらとわたしの頭脳は月とスッポンぐらいの差があるだろが。

「邪魔なんだよ、掃除の邪魔、どつか行けよ、うぜえ。」

「そうだよ、どつか行け、もしくは死ね。」

「くつ、眞面目に掃除なんかしてよー、バッカじやねーの おわつ！」

「外人がテメーが死ね うお！？」

いきなり篠ちゃんと桃華ちゃんが男子の胸ぐらを掴みました。

篠ちゃんは一夏君が好きだから怒つてゐるんだらうけど、桃華ちゃんは何で怒つてゐんだけう。

まさかわたしのため、そつだつたら嬉しいな。

「眞面目にすることの何がバカだ？お前らのよつた輩よつは、はるかにました。」

「私たちは外人じゃない、あなた達が消えて。」

「な、なんだよ……何ムキになつてんだよ。離せよ。」

「ざけてんじやねえよ、離せよ。」

あーあ、男子一人がもがいています。篠ちゃんをバカにするのがいけないんだよ。桃華ちゃんは力強いな。

「あー、やっぱりそうなんだぜー。こいつら夫婦なんだよ。知つてるんだぜ俺、お前ら朝からイチャイチャしてるだろ。」

「こいつら、女のくせに女が好きなんだぜ。こいつ、この前男女に抱きついてたぜ。」

「外人なんて授業中ずっと篠ノ之のこと見つめてたぜ。」

「うわつ、バツカだな、女が好きつて確かに男よりは好きだけど、妹に抱きついて何が悪いんだよ。て言つか桃華ちゃんがわたしを見てたつて嬉しいな。

「だよなー。このなんか、こいつリボンしてたもんなー！男女のくせによー。笑っちゃま ぶごつ！？」

「外人どものくせに俺らと同じ髪の色してんじやねえよ、テメーらにはハゲが くべつ！？」マジでキレました。

「外人だから黒髪がダメとか法律にあんのつてーの、だいたい外人じゃないし、乙女にハゲが似合うとか論外だろ。殺す。

「一夏もあれだけ言われたらねー。」

「笑う？何が面白かつたつて？あいつがリボンしてたらおかしいかよ。すげえ似合つてただろうが。ああ？なんとか言えよボケナス。」

「外人じゃねえって言つてんのよ。だいたいテメーら下等生物が真似したんだろうが。この子が黒髪で何が悪い、すごく可愛いだろうがクズが殺すぞ。」

「お、お前らつ！－先生に言うからな！」

「勝手に言えよクソ野郎。その前にお前らは全員ぶん殴る。」

「面白い言えるなら言えよ。まあ生きてるかわかんないがな。さて、君たちはどんな声でなくのかな。」

「やつばい面白いははは。」

「10分ぐらいしてから先生達が来ました。」

「一夏は三人に圧勝、わたしは三人をフルボッコにしました。」

そのうち一人は骨折したそうです。

そのせいでわたしは一週間謹慎処分です。

まあお姉ちゃんのおかげでそれだけですみました。

処分明け

「ごめんなさい、私のせいで。」

「いいよ、だいたいわたしが怒つて殺つただけだし。」（漢字間違
いではない）

「で、でも」

あーめんどくさい。

「じゃあ友達になつてそれでいいよね。」

「えつ」

「友達は助けるのが普通でしょ？」

「うん。」

「よろしくね。桃華ちゃん」

「はい、よろしく。結歌ちゃん。」

こうして私は桃華ちゃんと友達になつた

第四話 友達（後書き）

誤字脱字感想といつありましたらよろしくお願いします。

予告

「私の子を否定するなんて」

起じる束それによつとある事件が起じるそして別れる友たち。

第五話

「バカと怒りと白騎士事件」

お楽しみに

第五話 事件（前書き）

第五話白騎士事件です。

千冬の戦闘？シーンはありますか第五話どうや

いつも、結歌です。

わたしは四年生ですが、もうすぐ五年生です。

そして、お姉ちゃんヒロの開発を始めてはや四年、ついにヒロが完成しました。

そして今田は発表の日です。

といつてもわたしは学校なんについて行けないですけどね。

ショボーン

でも、お姉ちゃんが、

「製作者のところにゆいちゃんの名前も入れといたからだいじょうぶイブイ。」

つて言つてました。

ISが認められたらわたしトレーニングのかなー？

つてISは、認められず、お姉ちゃんが怒つて白騎士事件起しちゃ？

つてことはわたしもお尋ね者ヒロー。

まあいいか。

お姉ちゃんについて行けば安心だし。

でもそうしたら篠ちゃんや一夏君千冬さんにお父さんお母さんにお会えなくなるのかー。

あれ、そう言えば神様に男にしてつて頼んだら、

「じゃあ二重人格ならぬ二重人格にしてあげる。」

つて言われなかつたつけ？

つて言うか二重人格つつ何？

二重人格は二つの人格でことだから、二つの体格？つまり、男と女の体、うーんどうこうと？

まあお姉ちゃんにでもたーのも。

今は授業に集中しよ。

ポツパー

「お姉ちゃんただいま。」

あれから時間がたち、わたしは家に帰つてきました。

「お～か～え～り～」

うわ、なんだかすこく怖いです。

どうせEISが認められず、お姉ちゃんは怒つているんだもんな。

「ど、どうしたの、お姉ちゃん。」

「あのクズども、私達の子を否定しやがつて。」

まあ仕方ないだろうな。だって十五歳と十歳の女の子に今までの兵器を上回る性能を持つた、ものを造られたんだから抵抗するよね。

「よし、あれをやひつ。」

「あれって、もしかしてあれ？」

「うんあれ～」

あれとは、私が事前にEISが認められなかつた時に、世界にEISを認めさせる作戦、ケースE579のこと、そつ白騎士事件です。

「つふふ、」これで世界は私達ね子を認めざるおえない。けつけつけ。

「

お姉ちゃん怖いです。

「はあ、仕方ないな、じゃあ、千冬さん呼んで来るかひ。」

「うん、よひしへ。」

ポツパー

「なんだ束。」

わたしは千冬さんを呼んで来ました。

ふう、疲れた。

「やあ、ちーちゃん良くなってくれたね。」

「何で呼んだと聞いているんだ。いま、一夏と遊んでいたところ

のよ。」

「ここからわたしは必要ないので、白騎士の最終調整でもしますか。

うーん、いいをいいにして、ひとつ。

「はあ？ 何を言つてこらんだお前は。」

「まあまあそういうわけに。」

あ、終わつちやつた。

ラノベでも読んでもますか。

「はあ～。お前バカか？」

「まあ良いではないか良いではないか。

あー、ガンダムっこ面白い。

「は～分かつた、手伝えばいいんだろ。」

「やつたね、ゆーちゃん白騎士調整して。

おつ、終わつたか。

「もうひ、終わつてる。」

「さすがゆーちゃん。」

ハッキングの用意してつと。

「じやあちーちゃん、装着してね。ヒックティングとフォーマットすませるよ。」

ポツパー

「ふう、完かつと、どうちーちゃん。」

「ああ、さすがだな東。私の想つよつて動く。」

「やつでしょやつたね、ブイブイ。」

「やつやくつですいませんが。行けますか千冬さん。」

「ああ、行けるぜ。」

「じゃあ。」

「うん、そうだね。」

「ああ、織斑千冬、白騎士いくべ。」

「じゃあ、お姉ちゃん、いくよ、」

「うん。」

「「スイツチオン」」

ポチ

よし、わたしの仕事はもう終わり。
じゃあ逃げる準備でもしますか。

篠ちゃんの部屋にお別れの手紙をおこし。
台所にねお母さんとお父さんぐ。

あと、本棚を量子化して、量産しておこたコアを置いて、この家と
もおやうばか、色々あつたな。あつ、ちようどよく千冬さんが帰つ
てきました。

「お疲れちーちゃん。」

「ああ、」

わたしは千冬さんから白騎士を返してもいいし、解体します。

あと、コアを初期化して。

「終わつたよ、お姉ちゃん。」

「うん、分かつたよ、じゃあお別れだねちーちゃん。」

「シリアルス風に言つたな、お前はいつでもビードル、」「ちーちゃん
つていつてくるだろ。」

さすが千冬さん、お姉ちゃんのことを分かつてます。

「じゃあ、一旦バイバイちーちゃん。」

「ああ、」

さて何処に行きますかね。

少しの間はアパートかな。

「では、さよなら千冬さん。あと、一夏にまた会いに来るって、伝えといで下さい。」

「ああ、分かった、束を頼んだ」

「はい。」

「ひどいよちーちゃん普通逆じやないの。」

まあ、ほつといで。

こうしてわたし達の逃走生活が始まった。

第五話 終わり

第五話 事件（後書き）

誤字脱字感想とつありましたらよろしくお願いします。

次回 第六話

「本当に男の子の体があつたよ。」

見つかる真実

「これはエラ？」

見つかるエラ

「／＼／＼」

見られる裸

次回

「男と女とチヨーンジ君」

お楽しみに

第六話 男子（前書き）

今日は大晦日ですね。
どうでもいいけど
第六話です。どうぞ

第六話 男子

「どうも結歌です。

今はE-Sを発表してから一ヶ月。

全国の小学校では春休みが始まるところです。

そんな日でもわたし達は、大忙しです。

「お姉ちゃん、撃たれるよ～」

「はつはつは、さすがの私でも困ったな。移動式ラボをミサイル型にしたのがいけなかつたかな？」

「だから言つたじやん絶対ダメだつて言つたじやん！ そんなことより、逃げなきや。」

「そうだね。」

大忙しです。

ポッパー

「はあ～、なんとか逃げられた。けど、ミサイル型は無しだよ。」

「え～、ブウブウ。仕方ないな～、じゃあ人参は？」

う～ん、まあそれなりいいよね。

「いいよ。」

「え～、いいの？ えつ～いいの？」

何でそんなに驚くの？

別に入参なら撃たれないからいいじやん。

「別にいいよ。」

「あ～、そうですか。（ときどき言つたつもりなのに、まあいいか。）」

それにしても何もないと暇だな～。

ろくに買い物にも行けないし。

「あ～、暇だな～。お姉ちゃん学校行きたい。」

「それは無理なんじやない。」

やつぱり無理か。

あつ、そうだ。

「お姉ちゃん、男の子になれば行けるかな～？」

「えつ、男の子？」

「そう、わたし二重人格ならぬ二重人格なの。」

「えつ、二重人格？」

「そう、二重人格は、二つの人格でしょ。わたしのは男の子と女の子の体があるの。」

わたしもよくわからないけど。

「じゃあ、男の子になつて。」

「えつ、う～。わたし体かえられないの。」

「え～、じゃあ行けないじやん。」

「だから何かつくつてお願い。」

「グハツ～（上田遣いでお願ひは禁止だよ。）」

えつ、お姉ちゃんが吐血した。

「お姉ちゃん大丈夫？」

「うん大丈夫だから待つて。」

二日後

あれからお姉ちゃんに色々本当色々、調べられて、本当に男の子体があることがわかりました。

今は、お姉ちゃんに女の子と男の子の体が入れ替わる装置を作つてもらつてます。

「ふつ、ゆいちゃんできたよ。」

おつ、できたよつです。楽しみ。

テケテケ。

どれどれ、うわ～、なにこれ首輪？

「これは、ゆいちゃんの意識まあ、ぶつりかけ壱つと魂？を一回この機械に取り込んで、その間に体をチーンジしてその体に、わつき取り込んだ魂？を入れる装置だよ。」

うわっ、すごいな。

やっぱり天才（天災）だ。

「うわっ、すごいね。」

「そうだね、すごいんだよ。でも、使うと両方の体が成長遅れるから。」

えへ、それはやだな。

でもみんなと会えるならいいか。

元から小さいし、胸はどうせ小さいんだからいい。

「いいよ。元から小さいし。ありがとねお姉ちゃん。」

「うん。」

よし、転校の手続きしなきゃ。

まず、戸籍を偽装作成して。

ポッパー

よし、終わった。

あ、そういうばどりゅあつて学校に行くんだろ？

「ねえ、お姉ちゃん。学校までどうするの？」

「前買つた（奪い取つた）一軒家にワープ装置置こいたから、そ

このワープ装置に乗れば行けるよ。」

うわっ、すごい用意周到だな。

でも、これで学校に行ける。

「ありがとね、お姉ちゃん。」

「うん、他にも困つたら、お姉ちゃんに任せなさい。」

「じゃあ、片付けして。」

「えつ、それはできないかな？」

まあ、いいや。

よし、一回使ってみますか。

どう使うんだ？

あ～ここを回すのか。よし。

この装着何か奴隸の首輪みたい。

「お姉ちゃん、回すよ。」

「うん。」

力チ

ダイヤルみたいなのを回すと、わたしの体は光に包まれ、光が收まると、

「う～、う～ん、成功かな、あつ……」「う～ん、成功らしい。

あれ？ お姉ちゃんの顔が赤くなってる？

「どうしたの？」

「あつ！ あつ！ あつ！」

お姉ちゃんは、あつあ言いながら、わた、ちがかつた、ぼくの体を指差してます。

ぼくの体に何かあつたのかな？ そう思いぼくの体をみます。

「なつ、なんで裸なの～」

お姉ちゃんが赤くなつたのは、ぼくが裸だつたからか。

それにも、髪長いし、声高いし、鏡見ると女顔だし、本当女の子みたい。

てか、体白いな。

足もお腹も腕も、つてえ～え！

左腕に、「これ ゾ ビです ？」の、ゴ のガントレットみたいなのついてるし。

「お姉ちゃん、なにこれ。」

「う～ん、調べてみようか？」

「うん。」

ポッパー

あれから色々調べた結果。

このガントレットは、ISだそうです。

しかも、今の技術では、ありえない機能ばっかり。
ということは、これが神様が言ってたISか。

しかし、ガントレット邪魔だな。

これ消したりできないのかな。

無理だよね。

つて、うわっ、消えた。

でもつけてる感覚はある、つてことはステルスか。
「すごいね、このIS。でもなんでこんな持ってるの?」
うつ。

「さあ。

「ふーん、まあいか。

ふう、さすがに神様にもらつたとか言えないよね。

「それより、なんか服ないの。恥ずかしこよ。」

「女の子用しかないよ。」

まあ、着れるならいいや。

今度買いにい。

「お姉ちゃん、ISも一緒に移動するよつにしどい。」

「うん、わかったよ。」

これで学校に行ける。

一夏や優斗、千冬さんに桃華に会える。

そういうえば、五年生になるのか。

五年って言えば、鈴ちゃんが転校していくな。
仲良くなれるかな?

楽しみ。

こうして、ぼくの新たな生活が始まったのであった。

第六話 男子（後書き）

誤字、脱字、感想、アドバイスとうあります。 では、よいお年を。

第七話 転校（前書き）

第七話 鈴が登場します。

第七話 転校

四月、新たなる始まりの月。
どうも、結渡です。

ちなみに、名字は夢音です。

またちなみに、人の夢で届くよつた音、といつ意味です。
クラスは情報操作して一夏と同じクラスにしてもらいました。
優斗は……隣のクラスか。まあいいや。

あつ、鈴ちゃんだ、挨拶でもしこうかな。

「ハアハア、二人ともおはよう」さいます、私は一人が入るクラス
の担任の、緒方です。よろしくね。」

また、緒方先生担任か。ちなみに、緒方先生は、1、2、3、4年
と担任です。

「よろしくお願ひします。」

「よ、よろしくおねがいシマス。」

鈴ちゃん、まだ日本語になれてないから、噛んじやつてる。
「結渡君、鳳さん^{ファン}はまだ日本に来たばっかで、日本語がよくわから
ないから仲良くしてあげてね。」

本当、優しい先生だな。

「はい、」

「ありがとう。あつ、もう教室だね。呼んだら入つてね。」

「はい。」

先生は教室に入つていきました。

さあ、挨拶^{ランキン}でもしますか。

「鳳鈴音さんでつあつてるよな、ぼくは夢音 結渡 よろしくね。

「よ、よろしく。」

「一応中國語話せるから、気軽に話しかけてね。」

「ありがとう。」

「どうぞ、入ってきて。」

「呼ばれたね、行こうう鈴音さん。」

「鈴、」

「え?」

「鈴でいい。名前、呼びにいい。」

「そう、じゃあ行こうか、鈴ちゃん。」

「うん。」

ガラガラ

さて、一夏は気がつくかな?

「失礼します。」「

あれ、一夏した向いてる。
つまんない。

「じゃあ、自己紹介して。」

「はい。」

あれ、一夏が反応した。まあ、声同じだし。

「唯火学校から転校してきました。夢音 結渡ですよろしく。あつ、
ちなみに、女の子ではなく、男の子なので、間違えないでください
ね。」

ガタツ

お、一夏が驚いてる。

ちょっとからかってみますかな。

「一夏君、自己紹介の途中に立っちゃダメだよ。」

「え、あつ、ああ。」

ちつ、素直に座りやがった、つまんない。

「え、一夏の友達?」

他が引っ掛けたりやがったか。

「違うよ、最初ってほとんど名前順で座ってるでしょ。だから、配
られたクラス分けの紙で見てね。」

「スゲー。」

実際には知ってるんだけどね。

まあ、できるけど。

「ハイハイ、次、鳳さんよろしくね。」

鈴ちゃん大丈夫かな？

「ファ、鳳 鈴音^{リンイン}デス。日本に来たばっかなので、日本語よくわか

んないけど、よ、よろしくねお願いします。」

「あ、話すときはゆっくり話してあげてね。」

「じゃあ一人は空いてる席に座つてね。」

ぼくは、桃華ちゃんの隣じやん。

あ、一夏こつち見てる、おばたき信号で、

「後で話さく」

と、

「結歌ちゃんよろしくね。」

「気づいてたんだ。でも、今は結婚だよ。」

「じゃあ、よろしくね。」

「うん。」

ポッパー

あれから時間がたち、ぼくは今、男子トイレにいます。

「今までどこいった、何で男なんだよ。てか、唯火学校つてなんだよ。」

あー、ひるむわこつむわこ。

答えてやるから。

「最初のから教えるよ。まず、HISのヒュースは見た？」

「ああ、束さんが作つたやつだろ。」

ズルツ、何でそこまで見ててわたしの名前出ないの。

「HISの製作者はお姉ちゃんとわたしなの。」

まったく、本当バカだな。

「へーつて、うわー。えつ、お前がIS作ったのか。」

「しー、あんまり大きな声で言わないで、だからわたしも指名手配されてるの。だから逃げてたの。」

「そりだつたのか。」

「ふう、疲れた。」

まあいい次だ次。

「で、男なのは、女だと指名手配されてるから男なら大丈夫だろつてこと。」

「へー、まあそれほど変わってないけどな。」

「うつせいなー」

一番気にしてる」と。

「それより、何で男になれんだよ。」

あーめんどうさい。

「これこれ」

ぼくはチーンジ君をさす。

「それがなんだ?」

はー、何でわかんないの?
話聞いてればわかるでしょ。

「これが、女と男を変える装置なんだよ。」

「はーなるほど。」

やつとわかつたか、疲れた。

「それなら、口調変えろよ。」

そもそもそうだな。

「わかつた、精進する。」

「おう。」

「そして、唯火学校は、そつちのほうが『つきやす』にかなつて思つて。」

「なんだそれ。」

「へー、一組の転校生つて、篠ノ之さんだつたんだ。
えつ、今の声は、優斗?」

「優斗、何でいるんだよ。」

「いやや、いけないかな?」

いや、そういうわけじゃないけど。

「友達なんだし、良いんじゃないかな。だいたい、見たらわかるよ。

「それもそうだな。

「じゃあ、他の人にはぼくの事内緒だからな。」

「わかったよ。」

キーンコーンカーンコー
ン

「チャイムだ、戻ろ!つぜ。」

そうだな戻るか。

こつしてぼくの学校生活は始まった。

第七話 終わり

第七話 転校（後書き）

誤字脱字感想アドバイスなどありましたらよろしくお願いいたします。

次回 第八話

「なんで女子の制服！？」
すり替えられた制服

「お前女子じゃなかつたの！？」
間違えられる性別

「これからよろしくな」
新しい友達

次回

「中学と遅刻と女子用制服」

お楽しみに

第八話 中学（前書き）

第八話 弾君の登場です。

第八話 中学

どいつも、結渡です。

小学校も卒業して、今日から中学生です。
さて、制服着て。

力チャ

やつぱり、この中学の制服のスカートは可愛いな~、
……つてこら~。

「お姉ちゃん、何で女子の制服になつてんの?」

プンスカブン

「イヤー、可愛いかなつて、似合つてるから大丈ブイ
「お姉ちゃん、制服どこやつた?」

ぼくは、少し殺氣を出して聞きます。

「「めんなさい、捨てちゃいました。てへ。」

捨てちゃつた?

ハハハハハハ

「てめえ、じゃあぼくは何着てけばいいんだよ。」

「え~っと、あつ、それ着て」

「てめえ、なめてんのか、ぼくは男だ。これ着てつたら、ただでさえ女みたいなのに完璧に、勘違いされんだろ?」

本当、幼児体型に女子みたいな顔なんだから。下手したら、幼稚園児だと思われる。

「「」めんなさい、それしかないから、明日までに買って来るから。」「は~、もういいや。

「ここでなんだかんだ言つても制服は、帰つてこない。

ビーチ、一夏達がフォローしてくれる。

「は~、もういいよ、これ着ていくから、でも、買つてきてくれ、頼むよ。」

「うん、わかつた。」

「女子のじゃないからね。」

「えつ、わつ、わかつてるよ、ば、バカにしてるのかな。あははは。

「わかつてんのかな、不安だ。

「じゃあ行くか、……つて、大変もうこんな時間。」

「（女の子だと思われるとか言つてるわりに、しゃべり方女子のみたいになつてゐる。）」「

ビーチ、一夏達は先行つただろ?から大丈夫。仕方ない、最速タイムだすまで。

「お姉ちゃん行つてきまーす。」「いっていらっしゃい」

まず、ワープ装置起動。
そして、設定完了。

ポチ

成功

「ヤバいよ～、入学式で遅刻とかないよ。」

そういうながら家の廊下を走る、靴はいて。

ガチャ

どうしようあと五分、わたしの学校までの最速タイムは六分。

最速タイム更新するしかない！

「どうやあ～」

「つおー！」

えつ！

どん

キヤ

「うわー。」

いつたゞ、

「大丈夫か？」

「あつ、はい、大丈夫です。わたし急いでるんで、すいませんでした。」

いつそげ

「おい、ちょっと、」

何か言つてた気がしたが、今は無視だ。

初日から遅刻したら、夢の生徒会に入れないと。

入学式はギリギリセーフ

でした。

今は各自自分達のクラスへ向かつてます。

わたしのクラスは、一夏と一緒にだね。

おつと、着いた、席順は男女交互で指定された席です。

つまりわたしの前後は女子なので、周りから見ると、女子が三人並んでるよう見えてつて、あれ、わたしの前後男子だよ。

あれ〜、名前が『結渡』じゃなくて『結歌』になってる〜。

おかしいな〜。

あのくそ姉つ、やりやがったな。
学校のデータベースにハ
ッキングして、ぼくの性別女にしゃがつた。

「お〜、席はここか、ん? おい、なに泣いてんだ〜って、あー、あ
んたさつきの女子!」

うるさいな。わたしは泣いてなどいない。
ただ、って、あー、

「さつきの、あつ、『めんなさい』。急いで。
『いって、あつそれよりこれ、落としてたぞ。』

えつ、あつ、本當だハンカチなかつた。
意外と優しい人だな。
つて、弾じやん!

「ありがとつ。」
「それより、なんで泣いてんだ。それより、女の子があんなハンカ
チ持つてるなんてな。」

言つたな、一度も言つたな、親父にも言われたことないのこ、つて、
親いないんだけど。

「わたしは男だ。」

「えつ、でも女の制服。それにお前と席も。」

「うへ、あへ、えへと、」れば、お姉ちゃんの悪戯で。」

「どんな姉だよ。」

「ははは。」

家の姉は天災です。

「それより、似合つてんな、本当に男か?」

「男だよ!似合つてるのは、その一、ありがとへ。」

「おう、おう、それより小さいな~お前。」

「つむせいな、ほつといてよ。」

「まあ、可愛いからいいんじゃないか。」

「かつ、可愛い、わたしが!?」

「ああ、普通に。」

「ありがと、~~~~~」

うへ、男なのに喜んでどうする。

「おう、おう、(ヤベ)ドキッとした(そつだ、自己紹介してなかつたな、五反田)」

「うん、よろしく弾くん。わたしは夢音 結渡だよ、よろしく。」

「えつ、名前には篠ノ之結歌つて。」

「それは、お姉ちゃんの悪戯だから。」

「そ、そ、うか。よろしくな結歌。」

「結渡だつて。」

「ポッパー

『さよなら』

「よひ、結渡？俺達皆同じクラスだぜ。」

「本当…やつたね。」

久しぶりだな…皆と同じクラス……てか、一回もないじゃん。

「おこ、結歌ここにまほりは？」

ああ、紹介しなきゃ。

「えつと、この男の子は、織斑 一夏で、こちちは、佐藤 優斗、こっちの女子は、夜長 桃華でこちちは鳳 鈴音、皆わたしの友達だよ。」

「へー、俺は、五反田 弾だ、よひしく。」

「おひ、よひしくな。」

「よひしくね。」

「よひしくお願いします。」

「よひしく。」

ふつ、紹介終了。

「て言つた、結渡何で女子の制服なの？さうで名前まで変えて。まさか本当は女の子？

「似合つてるわね。」

「嬉しくないよ。これは、お姉ちゃんの悪戯で。」

「ああ、の人ならやりそうだな。」

「本当、あんたのお姉ちゃんって、どんな人なのよ。」

「本当、災難です。」

あ、弾くんが、話についていけない。

「あー、結渡の姉さんは、いろいろ大変なんだよ。体育着、女子のに変えたり。水着、女子のに変えたり。」

「ははは、そりゃー大変だな。」

「それより、今日どうするんだい。」

「どこにする?」

「なあ、俺ん家来ないか?」

えつ、弾くんの家?

確か、定食屋だっけ。

「俺んち定食屋だからさ。知り合つた記念だ。」

ほり

「お、いいな、行こ。よろしくな弾。」

「おう。」

と、言つことで、今日は弾くんの家に行きました。

蘭ちゃん可愛かつたな~。

これがぼくの中学生生活の始まり。

第八話 終わり

第八話 中学（後書き）

誤字脱字感想アドバイスなどありましたらよろしくお願ひいたします。

次回 第九話

「バイバイ」

帰国する鈴

「卒業式」

中学生生活の終わり

次回

「別れと回想と卒業式」

お楽しみに

第九話 別れ（前書き）

第九話 これで過去の話は終わりです。

第九話 別れ

どうも結婚です。

中学に入学して一年が経ちました。
今、ぼくは空港にいます。

「鈴ちゃん、本当ににいの? 一夏達に言わなくて?」
「うん、悲しくなつちやつから。」
「……そつ。」

空港にいる理由は、鈴ちゃんが中国に帰るからだ。

「……じゃあ、何でぼくには言つたのかな?」
「えつ、あつ、それは、あ、あんた女の子みたいだし。」
「う~。でも、女の子なら、桃華ちゃんでもいいんじゃない?」
「うつ! それは。あーもう、あんた小さいし、可愛いから、妹がいたらこんなんだろいなつて思つてたら、すぐ安心してね、なんか、側にいてもらいたかったの。あ、恋とかじゃないからね。ただ、結婚がいると、なんか癒されるから。」
「ふふ、なにそれ。でもありがとね鈴ちゃん。大丈夫、また僕達会えるから。」
「予言? ふふつ、当たるといいわね。」

「大丈夫、当たるから。」
「そ、じゃあ。」

さよなら

鈴ちゃんがぼくにだきつこつきます。なんか凄く暖かい。

「またね。」

「うん、また。」

鈴ちゃん、行つちゃいました。寂しくなりますね。

まあ、また会えるけど。

それにもしても、この一年、いろいろあつたな。

千冬さんが第一回モンドグロッソ出たり。

決勝で一夏拐われたり。その時の恩で千冬さん、ディッシュって、わたくしも土田に特訓に行って、ラウラと会つたり、クラリッサさんとアニメの話したり。

鈴ちゃん帰つたり。

まあ、これからも大変ですけどね。

わたしがIS学園行くために、外国とかに恩売らなきや。やがて

そうしなきや、監視とかついたりするから。

最初は一夏の恋人（候補）達に会いに行つてついでに、ISの講義でもしてくれば、良いだろう。

ちなみに、わたしは一回みんなに会いに行つたよ。

今回は、ぼくが会いに行こう。

イヤー、今年は大変だったー。

世界中駆け回つたし。

でも、監視とか勧誘とかはやめてもらひことに成功しました。よかつた。

それより一夏は、原作どつりEISを起動させましたが、3日前に、わたしが、EISの適性のやつ政府に測りに行こうとしたら、EISを見たいつて、言うから優斗を連れてつたら、EISを起動させひやつて、優斗も入学することになりました。

これが神様の言つてた、歪みかな？

それより、優斗は急な出来事だったんで、入学式の次の日に転入することになりました。

一夏には、もちろん白式を上げます。

優斗には、二年前から作つてた、GNドライブの試作機を上げます。ぼくは、神様にもらつたEISを使いますよ。

名前は、『ハーデス』です。

EISがあるつてわかつてからは、毎日起動してたし、戦闘訓練してたけど、まだ、セカンドシフト二次移項はしてません。なんでだろ？ あ、終わりました。さて、帰りますか。

入学までは、EISの調整とかするから、ずっと徹夜かな？

「じゃあね、一夏。」

「おひ。」

ちなみに、わたしで入学しますが最初の方は、ぼくでいよつと思します。名字は篠ノ之にしますが。

まあ、いざれみんなに、ぱらしますけど。

「ただいま。」

ひつじて、徹夜続きの日々が始まりました。

第九話終わり

第九話 別れ（後書き）

誤字脱字感想アドバイスなどありましたらよろしくお願いします。

次回 第十話

「織斑くん！」

呼ばれる一夏

「げえ関羽！？」

現れる英雄？

パンツ！

炸裂する必殺

次回

「入学と英雄と出席簿」

お楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5703z/>

IS 歪んだ世界

2012年1月5日23時48分発行